

小川政弘作「日本を愛した神の人
スティーヴン・メカフ物語」

—キャスト(50音順)—

(セリフは、取り消し線で消してあるところ以外は、原則全て読みます。)

小川政弘	スティーヴン・メカフ／神の声
東裕之	エリック・リデル／牧師／ウォレン・ペイン／宣教師／男子高校生
荒木寛二	ワトモウ宣教師／アメリカ人将校／OMF 本部長／藤田／デイヴィッド・ポーソン 牧師
飯島勅	小川洋宣教師／ダグ・エイブラハムズ／日本人牧師／ディック・ルーカス牧師
大橋めぐみ	アナウンサー／男の子(笑)／ダグの妻オルガ／日本語教師／藤田の娘／保養 園の女性／久末おばあちゃん
中尾隼人	小坂少佐／日本人①／増田／ドン・モリス／久末おばあちゃんの息子
中橋祐貴	スティーヴンの父／日本人②／宿屋の青年／角田／トニー・シュミット
中橋文	スティーヴンの母／ウォレンの妻ドリーン／若い女性
三俣雅通	アメリカ人兵士／店員／村人／吉さん
三俣京子	聖書朗読／スティーヴンの妻エヴリン／看護師／農家の奥さん／若い女性②
(ハスチムゲ)	

小川政弘作「日本を愛した神の人 スティーヴン・メカフ物語」

《第1部 来日まで》

アナウンサー(大橋)第二次大戦中は中国で日本軍の捕虜として苦しみを受けながらも、戦後、日本の地で、38年の長きにわたって働かれた一人の元イギリス人宣教師が、2014年6月7日、故郷の地で天に凱旋されました。86年の生涯でした。彼の名は、スティーヴン・メカフ。友人たちからは、スティーヴという愛称で呼ばれていました。このドラマは、そのメカフ宣教師の波乱に富んだ生涯を、資料を基に、一部フィクションを交えて、ドラマ化したものです。

音楽 (ブリッジからナレーションのBGMへ)

アナウンサー メカフ宣教師が亡くなって13日後の2014年6月20日、ウィンブルドンの教会で告別式が行われ、ロンドン JCF (~~Japanese Christian Fellowship~~ 日本人教会)の牧師で、一時日本に帰国中の盛永先生に代わり、メカフ師を愛する日本人の一人、小川^{ひろし}洋宣教師が、故人の思い出を語りました。

小川宣教師(飯島) この悲しみの時に、言葉はさして慰めになりませんが、それでも、私どもが、故人のご家族と、その全てのご友人に対して、どんなに深く思いをはせているかを知っていただきたいと思います。とりわけ、Reverend Metcalf メカフ先生は、奥様の人生の中で大きな部分を占めておられましたので、奥様にとって、先生の死はどんなに大きな痛手であろうかと思っております。私どもにとっても、本当に寂しく悲しいことです。

1990年に、日本での38年間の宣教師の務めを終えられてからも、先生は、JCFの同労者として、ロンドンやイギリス全土の日本人のために、またJCCE (~~Japanese Christian Conference in Europe~~ ヨーロッパ日本人キリスト者協議会)を通して、全ヨーロッパで労してこられました。Reverendは、日本語では“先生”と言いますので、私たちは故人を、尊敬と愛を込めて、“メカフ先生”とお呼びしていました。誰もが、人懐こい笑顔で語られる先生の、優しい、ユーモアあふれるお話に魅了されました。そして先生は、実際に、日本語のダジャレの名人でした。また、皆さんご存じのように、先生は中国の少数民族の言語や、日本東北部の方言も話すことができになりました。加えて幾つかの、古い時代の丁寧な日本語の言い方もご存じでしたが、それは先生の抜き出した言葉への熱心さとユーモア精神を示すものでした。

先生のメッセージは、いつでもイエス・キリストに焦点が当てられ、キリストの愛がどんなものであるかを示していました。個人的にも、先生のルカの福音書 22

章 31、32 節からの主のペテロへの励ましの説教は、私が人生の危機に立たされていた時、慰めと勇気を与えてくれました。その時、私が詳しく話をする前に、先生はただ何も言わずに私をハグしてくださり、「君の苦しみは分かっているよ」と言ってくださいました。ご自身がまだ少年の頃、中国で日本軍によって肉体的精神的苦痛を味わわされていまして、心から私を慰めてくださることができたのです。そんな日本人を先生は赦し、私たち全てを愛してくださいました。メカフ先生はキリストの香りを放ち続けられ、それを神様にささげる業を今まさに成し遂げられました。ですから私たちは、主を褒めたたえ、感謝をささげる者です。今や、天は、メカフ先生を迎えるために門を開き、ほどなく先生は、ご両親や、エリック・リデル宣教師や、既に世を去った全てのキリスト者に相まみえることでしょう。ソリ・デオ・グローリア、栄光が神にありますように！

アナウンサー ウインブルドン日本語礼拝の牧師で日本人女性を奥様に持つ OMF 宣教師パトリック・ワトモウ先生は、故人についてこのように語っています。

ワトモウ宣教師(荒木)スティーヴの父は中国の宣教師で、彼自身も父の任地で生まれ、戦時中は、日本軍の捕虜として苦しみを受けましたが、獄中で、あの映画「炎のランナー」で知られるエリック・リデルと出会いました。彼の信仰に大きく突き動かされたスティーヴは、「私は敵の日本人のために祈る」と言ったリデルの言葉が忘れられず、自分も日本人のために祈り、主の導きで、宣教師として来日したのです。彼は日本で約38年忠実に働き、流暢な日本語、中国語で北海道・東北にも住み、イギリスに帰国後も、在英日本人教会、家庭集会、修養会等で働きました。2005年に、スティーヴは自分の宣教師としての歩みをつづった「闇に輝くともし火を継いで」(原題 In Japan The Crickets Cry “日本ではコオロギが泣く”)を発刊しました。日本人はこのような人たちが今も地道な働きで平和を築こうとしていることを決して忘れてはならないでしょう。本当に彼は、生涯、日本と日本人を愛し続けた人でした。

アナウンサー それでは、今は亡きスティーヴさん自身の口から、彼の波乱に富んだ生涯を語っていただきましょう。小川政弘作、ノンフィクション「日本を愛した神の人 スティーヴン・メカフ物語」第1部「来日まで」です。

スティーヴン(ナレーション)(小川)私の父は中国雲南省で宣教師として働き、聖書を現地語であるリス語に訳すほど、熱心に伝道をしていました。私自身も、1927年10月23日、その地の昆明くんみんで生まれたんです。両親は、私が生まれたあと、そこから徒歩で1週間ほどかかる過疎地の村に、伝道のために移り住みました。その村には店はなく、月に1度開かれるマーケット市があるだけでした。リス部族の人たちは、原始的なアニミズム信仰を持っていて、木にも丘にも水を汲んだ川にも、靈魂が住んでいると信じていました。でも今、私の少年時代を振り返ってみると、それはもう自由な、魔法のような時間でした。けれども、6歳の時、まるで“島流し”

のような寄宿学校時代がやってきました。そこはそれまでの親元から 2000 キロも離れた、中国の北東部の隅っこにあったのです。しかしそこはまた偶然にも、のちに日本軍によって蹂躪された地でもありました。それは 7 年後の1940年（日本では昭和 15 年ですか）、太平洋戦争の始まる 1 年前、私が 13 歳の時で、私は日本軍の監督下に入り、中国の三東省ウェイシェンにある収容所に入れられました。日本軍の捕虜収容所というと、“泣く子も黙る”と言われたものですが、そこは軍人の捕虜収容所ではなく、“拘留収容所”と呼ばれ、取り扱いもかなり緩やかなものでした。そこの所長は小坂少佐といいました。

- 小坂少佐(中尾) お前は、確かイギリス軍宣教師の息子だな？
- スティーヴン はい、そうです。
- 小坂少佐 どうだ、勉強は進んでるか？
- スティーヴン ええ、時間割がちゃんとできてるので、勉強の時間には、よく勉強してます。
- 小坂少佐 (笑いながら)そうか、それはよかった。学べるうちはちゃんと学んどけ。あとで役立つ時がきつと来る。何か学用品で足りないものがあつたら私に言え。
- スティーヴン え？ ありがとうございます！
- ナレーション このように、最初の収容所の所長は、話の分かる人でした。でも、私が真に”敵を愛する”ことを学んだのは、その次に送られたウェイファン民間人収容所でした。そこは大きな収容所で、私が入所した時はすでに 1,500 人もいて、その中には 1,000 人のイギリス人に 200 人のアメリカ人がいましたが、ほどなく 100 人のイタリア人が送り込まれてきたかと思つたら、たちまち 2,000 人のピークを迎えました。そこに 1924 年のパリ・オリンピックの時の 400 メートル走のゴールドメダリストで、“宙を飛ぶスコットランド人”と呼ばれたエリック・ヘンリー・リデル宣教師が、聖書の教師として収容されていたのです。私がこの収容所に来て最初の日曜日、私はリデルに出会いました。
- 少年スティーヴン(モノローグ) あ、あの人、リデルさんだ！ エリック・リデルさん。そうか、彼は帰国しなかったから、捕らえられたんだ。
- ナレーション そうです、彼は、映画「炎のランナー」の主人公として知られているクリスチャン・スポーツマンで、私のあこがれの人でした。100 メートル走で本命と言われていた彼は、その競技が日曜日に行われることを知り、主の日の礼拝を守るために棄権するのですが、彼の才能を惜しんだ友人が、平日に行われる 400 メートル走に、自分の出場権を譲ってくれ、その種目に初めて出場した彼は、圧倒的な走りで見事に金メダルに輝いたのです。その記録は、その後 4 年間破られませんでした。でも彼はオリンピックの翌年の 1925 年、神様に中国宣教の召しを受け、スポーツ選手としての栄光のキャリアを捨てて、天津に旅立ちました。天津に着くと、彼はミッションスクールで理科を教えながら、宣教師として聖書を教えていました。やがて日本軍の中国侵攻によって日中戦争が始まり、彼は敵国人として

捕らえられ、一足先に、この敵国人収容所に送られていたのです。

ステイーヴン(モノログ) どうでしょうか、声をかけようかな。でも、僕のことなんか、覚えてないよな。

ナレーション そう、この出会いは、正確には“再会”でした。まだ戦争前、彼は、私が学んでいた学校を訪問していたのです。と、その時でした。そのエリック・リデルが、私に目を留めると、つかつかと近寄ってきたのです。

リデル(東) 君は確か、あのクンミンのリス村の寄宿学校で学んでたよね？

ステイーヴン ええ、そうです。あそこで、リデルさんにお会いしました。

リデル やっぱりそうか。名前はえーと、ステイーヴ、だったかな？

ステイーヴン は、はい、ステイーヴです。ステイーヴン・メカフです。

リデル そうか。もう自由には動けなくなったこの中国で、また君と会えるなんて、神様のお力だね。よろしく！

ステイーヴン こちらこそ！

ナレーション その時、私は 15 歳になっていました。その収容所は、日本陸軍警備隊や憲兵の監視下にはありましたが、ある程度の自治が許されていて、リデルさんは、自治会のリーダーとして、所内の教会で司式や説教を行いながら、小中学生の良き友、教師として、また父親代わりの働きを担っていました。私はすぐに、彼が聖書のみ言葉をこよなく愛しているだけでなく、どんな状況の中にあっても、そのみ言葉のように生きている人だと分かりました。

そんなある日、私は彼の聖書クラスで、マタイ伝 5 章～7 章の「山上の説教」を学んでいました。彼は、この箇所の中でも、イエス様が神に喜ばれる生き方について人々に教えておられる箇所を特に好んでいました。5 章の始めの山上の説教の教えから始めて、「自分の敵を愛する」ことをテーマにした、次の箇所に来た時でした。

聖書朗読(三俣京子)(マタイの福音書 5:43-48)「『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛しなさい。」

ステイーヴン リデル先生、今の僕たちには、敵は日本兵です。ここへ入る前にも、何度もいじめられました。友達のお父さんは、日本軍の捕虜になり、シンガポールで虐待されて死ぬほどの目に遭ったそうです。そんな敵でも、愛さなきゃいけないんですか？ 先生には彼らを赦すことができるんですか？

リデル 正直に言うと、私も日本人を愛することはできない。彼らは、占領地区の中学校に押しかけて、女子生徒を慰安婦として差し出すように校長に迫るんだ。我々西洋人は闇市で捕まっても 1～2 週間の独房入りで済んだ。だが、中国人は“チャンコロ”と犬のようにさげすまれ、ちょっとでも反抗すると、電気柵で首を吊るされ、見せしめにされたんだ。私は、無抵抗の中国人漁師が日本軍の戦闘機に銃撃され、殺害されるのを間近で目撃したこともある。

(一同に) みんな、あんな傍若無人な日本兵を誰が愛せますか！ イエスは、この教えを、“こういう姿勢でいるべきだ”という理想型として語っているだけです。

ナレーション
聖書朗読
けれども、聖書が次の箇所まで来た時のことです。「迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。」

ナレーション
彼はしばらく無言のままでした。ややあって、彼は私たちを見回すと、まるで自分自身に言い聞かせるように、きっぱりとこう言ったのです。

リデル
みんな、私が間違っていた。私は敵のために“祈る”ことを忘れていた。私たちは、愛する者のためなら、頼まれなくても時間を費やして祈る。しかし、イエスは「愛せない者のために祈れ」と言われた。だから君たちも日本人のために祈ってごらん。人を憎むとき、君たちは自分中心の人間になる。でも祈るとき、君たちは神中心の人間になる。人は、自分が祈っている相手の人を憎むことはできない。祈りは君たちの姿勢を変えるんだ。そういう私自身が変わらなきゃいけない。私は、明朝から、日本人と日本兵のために、朝 15 分早く起きて祈ることにする。

ナレーション
この言葉は、私の心の奥深くに、ズシリと落ちました。そして私自身も、思い切って、日本と日本兵のために祈り始めたのです。私がのちに、そのかつての敵国日本に、進んで宣教師として志願するとは、この時の私は夢にも思いませんでした。でも、振り返れば、この祈りが、私の心をそのように変えてくれたのは、紛れもない事実でした。

スティーヴン
リデル先生。僕も日本のために祈りを始めました。

リデル
そうか。それはよかった。この戦争は間もなく終わる。日本は負けるだろう。そのときに、この国に福音を伝えるのは、君たち若いクリスチャンたちだからね。

スティーヴン
先生、先生も一緒に行きましょう。僕は先生と一緒に働きたい。

リデル
行きたいんだが、このところ体のほうがね。君だから言うんだが、時々めまいと、頭痛がするんだ。だんだんひどくなるみたいで…。あつ！ あ～～～～(頭を抱えてうずくまる。)

スティーヴン
先生、リデル先生、どうしたんですか?!

リデル
あ、頭が…頭が！ あ、あ～～～～。

ナレーション
リデル宣教師は、過労による脳腫瘍に冒されていました。彼は、亡くなる3週間ほど前に、よろけるような体で私の部屋にやってきました。手には、一足のランニングシューズをぶら下げています。見ると、あちこちにつきはぎをして、かなり履き古したものでした。その靴を見ながら、私は収容所内で、彼と競走した時のことを思い出しました。

音楽
(ブリッジ) (回想)

ナレーション
私はあこがれの彼と、収容所内で2度競走したことがあります。2度とも、彼はそ

の靴を履いていたのですが、最初の時は、彼の圧勝でした。その時は、私は16歳、彼は41歳になっていて、私より2回りも年上で、とうに最盛期は過ぎていたのに、どこからあんな力が、と思うようなスピードでした。

ステイーヴン (ハアハア激しい息遣い) 速すぎですよ、先生！ もう最後の1週間なんか、ずっと前方にいる先生の姿がかすんできて、そのまま死ぬかと思った。

リデル (笑う) (荒い息遣い) この靴を履くとね、なぜだか力が湧いてくるんだよ。

ナレーション 2度目の時は、それから1年後でしたが、最後まで競り合って、やっと私が勝ちました。

ステイーヴン (ハアハア息遣い) やった！ 勝ったぞ。ゴールドメダリストに勝った！

リデル (荒い息遣い) 今回は負けたな。ま、これからは君の連勝だろう。

ナレーション それは、彼が亡くなる1年前のことでした。振り返って考えてみたら、その時もすでに、彼の脳は腫瘍に冒され始めていたのかもしれない。1年の間に、かなり力が落ちていたのが、はっきり分かるような走り方だったのです。

音楽 (ブリッジ) (回想終わり)

ナレーション それからしばらくしての、今日の訪問でした。

リデル ステイーヴ、君にこれをあげよう。履いてくれるか？

ステイーヴン でも先生、僕にはまだ今のが履けますから。

リデル いや、相当ひどいよ。(笑う) これだったら、あと2、3週間は持つだろう。私はもう履く機会はなさそうだから。

ナレーション 悲しいことに、本当にそのとおりにになりました。その日から2週間後の1945年2月21日、リデル宣教師は、43歳の若さで、彼が生涯愛してやまなかった天のイエス様のもとに帰られました。戦争が悪化する前に、カナダに帰されていた奥さんと3人の子どもたちにその死が知らされることはありませんでした。

私は、胸が押しつぶされそうな思いで、愛する先生の形見のぼろぼろのランニングシューズを履き、^{ひつぎ} 柩を墓地まで担ぎました。その時、私の心の中には、なんとも言えない悔しさがこみ上げてきました。

ステイーヴン(モノローグ) これが、あの偉大なオリンピックの英雄の最期にふさわしい場所なのか？ 敵日本軍の収容所の隅っこのみすぼらしい墓地に、棒切れをひもで縛っただけの粗末な十字架、墓碑銘は、靴墨で書きなぐった名前だけなんて…。

ナレーション 私は、その時もまだ、先生からもらった形見のシューズを履いていましたが、それがあの400メートル走でゴールテープを切った時に履いていた靴だったことは、のちになって初めて知りました。彼はそんなことは一言も話しませんでした。それを知った時、いかにも先生らしいと思いつつ、私は初めておいおい声を上げて泣きました。そして、心の中でこう祈ったのです。

ステイーヴン (祈り) (涙ながらに) 主よ。もし、僕が生きてこの収容所を出ることができたら、宣教師として日本へ行きます。

音楽 (ブリッジからナレーションの BGM へ)

ナレーション 1945 年 8 月、日本は6日の広島、9 日の長崎への、2度の原爆投下のあと、8 月15日、連合軍に無条件降伏をして、3 年 8 か月にもわたった太平洋戦争は終わりました。いえ、正確に言うなら、日本は中国で、1931 年に満州事変を引き起こして以来、実に 14 年にわたって無謀な戦争を継続したのです。日本の国は、物質的にも、精神的にも、疲弊しきっていました。私のいた収容所も、直ちに解放され、私は本当に久しぶりに、外の空気を吸いました。私は17 歳になっていました。もはや子どもではありませんでした。そして、”自分には、これからの自分の人生のコースを、自分で選択する自由があるんだ“ということに気づきました。その最初の選択は、長い間離れ離れになっていた両親や姉のルースと再会することでした。私は、生まれ故郷の昆明^{くんみん}目指してヒッチハイクで出発しました。道々、私は考えました。

ステイーヴン (モノローグ) 日本は、とうとう負けたんだ。これからどうしようか。

ナレーション 私の耳に、あの時リデル宣教師と交わした会話がよみがえってきました。
(回想)(エコー)

ステイーヴン リデル先生。僕も日本のために祈りを始めました。

リデル そうか。それはよかった。この戦争は間もなく終わる。日本は負けるだろう。そのときに、この国に福音を伝えるのは、君たち若いクリスチャンたちだからね。(強く)君たち若いクリスチャンたちだからね。
(回想終わり)

ステイーヴン (モノローグ)よし、僕は宣教師として、日本に行こう！ イエス様の福音を、あの、戦争に負けて心がすきみ切っている日本人たちに伝えよう！

ナレーション 不思議なことに、私の心から、日本人に対する怒りや憎しみは、ほとんどなくなっていました。その代わりに、彼らを愛し、彼らにまことの神を、まことの救い主を知らせたいという思いで、心は高鳴っていました。けれども、私の旅は厳しいものでした。ヒッチハイクですから、自分が希望する方向には必ずしも連れていってほられません。下ろされた場所は、当然見ず知らずの町。おなかには気を失いそうになるほどペコペコでした。でも神様は、私を見捨てませんでした。あるアメリカ人兵士が私を見つけて声をかけたのです。

アメリカ人兵士(三俣雅通) 君は、中国人じゃないな。そんなひどい格好で、どうしたんだ？ 親に置き去りにされたのか？

ステイーヴン いえ、収容所から解放されたんで、昆明の両親のもとに帰ろうとしたんですけど、途中で下ろされ、ここがどこかも分からなくて…。

アメリカ人兵士 そうだったのか。よし、とにかく私の駐屯地に一緒に来なさい。上官が何か方法を考えてくれるかもしれない。

ナレーション 駐屯地に着いて、その兵士から話を聞いたアメリカ人将校は、さっそく私の父

宛てに電報を打って、私の帰省を知らせ、出迎えるようにと知らせました。そして、その宛て名がメカフだと知って、私の顔をまじまじと見ながら、なんとこう言ったのです。

- 将校(荒木) 君は、メカフ宣教師の息子か！ 私は彼をよく知ってるよ！
- スティーヴン え、ほんとですか！
- 将校 ああ、私の部隊にも、何度か来てチャプレンとして聖書の話をしてくれたんだ。間もなくクシアン行きの飛行機が出る。昆明はそこから車で1時間だ。よし、ご両親のもとに連れてってあげよう。
- ナレーション なんだか夢を見ているようで、涙がこぼれました。神様は生きて働いておられたのです。こうして私は、何度も夢に見た、故郷の父母のもとに帰りました。
- スティーヴン お父さん、お母さん、ただ今帰りました！
- ナレーション そう言うのがやっつとで、あとは涙がとめどもなくあふれ出て、私はそれ以上話すことができませんでした。
- 父親(中橋祐貴) おお！ スティーヴか、無事だったか！
- 母親(中橋文) スティーヴ！ 生きてたのね！ ああ主よ、感謝します！
- ナレーション こうして両親と 7 年ぶりの夢の再会を果たした私は、それからの生き方を祈りながら考えた結果、両親と共に父の母国のイギリスには帰らないで、単身、母の母国のオーストラリアに移住して、そこの神学校に入学する道を選びました。宣教師として献身するには、まず聖書の学びが必要と思ったからです。そしてある日の聖書の授業で、私の心を徹底的に変える、み言葉に出会ったのです。
- 聖書朗読 (ルカ 23:34) 「そのとき、イエスはこう言われた。『父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。』」
- スティーヴン (モノローグ)これだ！ 今まで何度も読んだ言葉だけど、これまでは、この「彼ら」は、あくまでイエスを十字架につけた、ユダヤ人律法学者、パリサイ人、そしてナチスの犯罪人たちだった。だが、この私にとって、彼らとは“日本人”だったんだ！
- ナレーション 折も折、1948年のこと、私は、日本を占領していたマッカーサー連合軍最高司令官が、宣教師を募っているのを知りました。私は、直ちに宣教師派遣団体、OMF(~~Overseas Missionary Fellowship International~~)—国際福音宣教会に加入し、4年後の1952年、待望の指名を受けて、いよいよ日本へ旅立ちました。船には、1950年に勃発した朝鮮戦争に向かうイギリス兵 300 人も乗っていました。船の中で迎えた日曜日、将校から兵士たちに話をしてやってほしいと頼まれた私は、かつて学んだ恩師エリックの教えを説きました。
- スティーヴン あなたたちは平和のために銃を取り、国連軍の一員として戦って死ぬかもしれませんが。私は今、“まことの平和”というエリック・リデルのメッセージを携えて日本に向かっていきます…。

ナレーション

船は、広い太平洋を、一路日本の神戸港に向かっていました。それから38年間、私が全てを主にささげ尽くした日本へ！ 私はその時、25歳になっていました。

《第1部完》